

DOCTOR

自分の親だと思えば 多くのことを 受け入れますよね

貞元 洋二郎

さだもと・ようじろう ●さだもと胃腸内科クリニック院長。日本消化器内視鏡学会専門医・指導医。九州大学病院などでの勤務を経て2008年に開業。2011年に医療法人化。

100人を超える患者を 「家族」として接する理由



内視鏡検査が特徴のさだもと胃腸内科クリニック。来院する患者は1日に100名を超えることも。しかし、院長の貞元洋二郎先生は、全ての患者を「自分の家族」と捉えているのだそう。その理由とは？

内科を選んだ理由

菅 北九州市小倉北区のさだもと胃腸内科クリニックは、内視鏡検査を得意としていることで広く知られています。院長を務める貞元洋二郎先生の専門は内視鏡治療で、胃がん・食道がんにおいては300症例以上の経験をお持ちです。

本日貞元先生にクリニック運営についてお話を伺います。まずは、開業されるまでの経緯を教えてください。

貞元 私の父は自身で開業したドクターで、親戚にもドクターが多くいます。ですから、子供の頃から「お医者さんになる」と意識を持っていましたね。

菅 他の道に進もうと思ったことは全くなかったのでしょうか？

貞元 大学受験で浪人した際には「工学部に行こうかな」と少しだけ考えましたが、基本的にはドクター以外の選択肢を真剣に検討したことはありませんでした。

菅 大学時代はどのように過ごされましたか？

貞元 正直に申し上げると、積極的に遊んでいましたね(笑)。3年生まではラグビー部に所属していたのですが、試験休みなどで練習が2週間ほどなければ、そのわずかな期間でもバックパッカーとしてよく海外旅行に出掛けていました。

また、山岳部にも入部していました。北海道や北アルプスの山によく縦走していましたね。現在はコロナ禍で海外旅行

へいくことはむずかしいですが、近くの足立山にはよく行っていますよ。登山はとてもストレス発散できるんです。

菅 内科を選じた理由を教えてください。

貞元 私は消化器系や循環器系の内科科外科のどれかを専攻しようとしていました。それは、消化器系や循環器系が人の生死に密接な領域だと考えていたからです。やはり、命に直接的に携わりたかったのだと思います。

そして、結局は消化器内科を選択することになりました。私は父を理想のドクターだと思っています。その父は九州大学の第三内科にいたのですが、その影響もあったのだと思います。

マネジメントよりも大切なもの

菅 実際に医学部を卒業した後、貞元先生ご自身も九州大学の第三内科で勤務されたそうですね。

貞元 私は当初はいつか大病院で教授になりたいと考えていたんです。実際に当時は多くの論文を執筆していましたし、現在もその名残で国内外で学会発表や論文執筆もしています。

ただ、仮に私に相応の実力があっても、教授になることは容易ではありません。また、私は実際に大病院で働いてみて、教授は自分に向いていないかもしれないと感じるようになったんです。菅 なぜ考えが変化したのでしょうか？



「い」と伝えては、患者さんに向き合っているとはいえないですね。確かに短期的にはクリニックの売上になるかもしれませんが、でも、患者さんにも絶対にその恩恵は伝わってしまいます。

私は「患者さんを自分の家族だと思って接する」ことをモットーにしています。自分の家族であれば、 unnecessaryな検査を高い頻度で受けるように勧めませんよね。例えば、若い患者さんで胃の病気もなく、ピロリ菌未感染であれば「次は3年後に検査をしてみましょう。もし何か症状があったら受診してくださいね」と伝えるわけです。患者さんを自分の家族のよう

に捉え、正直に接してきたことで今があるのだと思います。

5秒の短縮を意識する理由

菅 遠方から通う患者さんも多く、検査数は20件を超えることもあるそうですね。私自身もお願いしたことがあります。スタッフの方を含めて無駄がない非常にスムーズなオペレーションだと感じました。チーム作りのポイントはありますか？

貞元 私にはもったいないくらいに優秀なスタッフが集まってくれているからこそ、円滑な運営ができています。私が「こうしてくれ」と特別に伝えることもなく、細かい部分は任せることができます。

スタッフの多くは私と同年代か、少し下の世代のベテランの方で、大きな総合病院できびきびと働いていた経験を持つ方です。ですから、採血や注射などの手技のレベルがとても高いんですよ。仮に採血を失敗してもう一度やり直すことになれば、3分ほど余計な時間が発生してしまいますよね。そのようなミスが極めて少ないんです。患者さんへの対応もよく、スタッフのレベルの高さのおかげで、効率化が実現できていると感じていますね。

また、開業当時は余裕があったのでそこまでしていませんでしたが、現在は検査数が増えってきましたので、本

に細かな点まで効率化を意識しています。

菅 具体的にはどのような効率化を行っているのでしょうか？

貞元 例えば、内視鏡にはゼリーを塗る必要があります。その待ち時間をなくするためにゼリーをスタッフが事前に塗っておいてくれるんです。他にも内視鏡を扱うにあたっては必ず私が手袋をするのですが、手袋は診察室から内視鏡室への移動中に装着するようにしているんです。内視鏡室についてから手袋を装着すると、それだけで5秒は掛かってしまいます。

1人当りではわずかな時間かもしれませんが、このような効率化が1日数十人、さらに年間で考えてみるととても大きな数字となります。結局はドクターである私の動きがボトルネックになってしまうので、少しでも効率化する意識を持つようになりましたね。

菅 そのような細部に及ぶ効率化があるからこそ、患者さんにしつかり説明する時間が作れるわけですね。

貞元 その通りです。「検査して終わり」では患者さんは不安ですよ。何か困っていることがあったり、相談したいこと



があつたりします。患者さんを「家族」として接するために、この時間は必要不可欠ですよ。こうした動きを支えてくれるスタッフには本当に感謝しています。

骨折の経験もプラスに

菅 コロナ禍での体制についてお聞かせください。

貞元 感染予防対策にはとても手間がかかりました。ただ、どの人が新型コロナウ

貞元 当然ですが、大学病院では基礎研究に重点が置かれるんです。また、部長などの役職を務めるようになれば、医療安全や病院経営に関する仕事が増えてきます。マネジメントに時間が割かれる一方で、患者さんと接する機会はほとんどなくなっていききました。

すると、父の影響もありもつと臨床に携わりたいという思いが強くなっていき、マネジメントよりも患者さん一人ひとりを見ることに私は幸せを感じるのだとわかりました。

菅 開業されたきっかけも、そのような思いにあるんですね。

貞元 そうですね。開業しようと考えたのは北九州市立医療センターに勤務していた頃です。2006年頃から開業を意識し始め、2008年にさだもと胃腸内科クリニックをスタートさせました。

開業してからは毎日ひたすら患者さんと向き合っています。この時間に私は生きがいを感じていますね。

開業時から20名を超す来院が

菅 私たちは様々なクリニックのお手伝いをしていきますが、消化器内科は軌道に乗るまでに最も時間がかかる傾向があると感じています。最終的にはドクターの実力に応じて経営も改善していくのですが、当初は患者さんを増やすことに苦労されることが多いんです。

貞元先生は開業時から順調に患者さん

が来院されていた印象ですが、開業時のお話を聞かせてください。

貞元 いやいや、夏の暑い日には、患者さんが4人しかいないということもありました。ただ、平均すると15〜20名程度の患者さんが中心となって毎日来てくれましたね。

菅 どのように患者さんが増えていったのですか？

貞元 開業以前、私は北九州市立医療センターで5年間働いていました。当時は約250名の患者さんを診ていましたが、その患者さんたちが開業当初から来てくれましたね。

菅 「内科のことは貞元先生にお願いしたい」という患者さんが多かったのです。

貞元 しかし、ご存知だとは思いますが、メディアへの露出でもない限り、消化器内科が急激に患者さんを増やすことはないでしょう。実際、私たちの内視鏡件数も患者さんの数に比例して徐々に増加していきました。

菅 着実に少しずつ増えてきたわけですね。

貞元 私は目先の利益に決してとらわれてはならず、患者さんのための医療を提供して、またリピートしてもらうことが一番だと考えています。

当然のことながら、患者さんの状態は一人ひとり異なります。どの患者さんにも「また一年後に検査を受けてください

検査はスムーズで、診察はとてもしっかり丁寧ですよ



菅 拓摩
すが・たくま ●税理士法人アップパートナーズ 代表社員。税理士。1973年生まれ。会計事務所での勤務を経て、2003年に開業。2006年、税理士法人へ移行。

イルスに感染しているかわかりませんから、「来院される方は全員感染している」と想定して、徹底して対策を行いましたね。

具体的には患者さんが触れた場所をすぐに消毒したり、発熱者には動線を別にして裏口から個室に入ってもらい、個室で会計を済ませ、その後はすぐに部屋の換気をしたりといった対応をしてきました。

昨年10月以降はクリニックでもPCR検査が実施できるようガイドラインに変わりましたので、すぐに私たちもPCR検査を実施して診断できるように対応しています。

クリニック運営以外の面での影響もありましたか？

貞元 コロナ禍での対応があまりに大変でしたから、この2年ほどはデータをまとめるのが難しかったです。ですから、論文の執筆や発表、学会活動が停滞してしまっています。ただ、研究マインドは今後も変わらず持ち続けていくつもりです。

〓 自身の趣味への影響はありましたか？
貞元 海外旅行や登山に関しては、先にお話した通りです。他にもスキーを趣味としているのですが、そもそも季節が限られたレジャーなのでそれほど影響は感じていませんね。

〓 コロナ禍とは関係がないのですが、実は4年前、スキーをしていて大腿骨を骨折してしまいました。手術をして5日目



には退院をしたので、一週間は九大の医局の後輩達に代診してもらいましたが、退院後は松葉杖を持った状態で診療をしていました。

でも、この経験から足が悪い人の気持ちがよく理解できるようになったんです。足が悪いと本当に生活することが困難になります。高齢者は足が悪くなってしまうのですが、その気持ちがわかるようになったことは自身にとってプラスだったと思います。

妻の協力なくして、クリニック運営なし

〓 貞元先生のご家族との関係についてお聞かせください。

貞元 長男は九州大学医学部の4年生です。できれば継いでもらいたいと思いますが、自分の人生ですから強制するつもりは全くありません。本人にはどうやら整形外科に興味があるようです。興味がある領域でなければ続けることは難しいので、私はそれだと思っています。実際に私が毎日仕事を続けられるのも、内視鏡検査が好きだからなんです。

また、クリニックの運営においては非常に感謝しています。毎日の窓口での計算、スタッフの給与計算や支払いなど、妻の協力がなければクリニック運営は成り立っていないと思います。私の個人的な観測では、10人に1名程

度のドクターがバックヤードまで自分で担当しています。でも、私自身がそれをやらなければならぬと考えるとゾッとしますね。医療に専念させてもらえて、本当にありがたいと感じています。

場では国税の最新の情報や、医療とは全く関係ない経営者の節税対策の話などを教えてくれましたよ。いわば、雑談なのですが、その雑談が非常に刺激になっていきました。コロナ禍において視野が狭くなってしまっている場面もあると思いますので、またこういう雑談から勉強できる場があればうれしいですね。

家族として患者を診る理由

貞元 以前お願いしていた会計事務所は、様々なことがきつちりと決まっています。あまり自由度がありませんでした。資金繰りや節税対策に関する私の思いに寄り添ってくれることもなく、先生にアイデアがないと感じていました。例えば「この機材をリースで借りましょう」とか「保険を活用しましょう」といった提案をしてくれることはありませんでした。

〓 私たちアップパートナーズグループとの関係について、率直な感想を教えてください。
貞元 以前お願いしていた会計事務所は、様々なことがきつちりと決まっています。あまり自由度がありませんでした。資金繰りや節税対策に関する私の思いに寄り添ってくれることもなく、先生にアイデアがないと感じていました。例えば「この機材をリースで借りましょう」とか「保険を活用しましょう」といった提案をしてくれることはありませんでした。

〓 コロナ禍以前は、年に1度は会食の機会を設けていただいていた。その

最後にクリニック運営における貞元先生の理念をお聞かせください。

貞元 先生は一日に100人を超える患者さんを診ることもあると思います。ある面から見れば、毎日同じ行為を繰り返しているとも言えますが、そのモチベーションはどこにあるのでしょうか？

貞元 何かをモチベーションにして患者さんを診ているわけではなく、私は本当に一人ひとりの患者さんと接することが楽しいんです。

〓 コロナ禍以前は、年に1度は会食の機会を設けていただいていた。その



さだもと胃腸内科クリニック
〒802-0064 北九州市小倉北区片野3丁目2-2
TEL: 093-922-35350
http://sadamoto.webmedipr.jp/
診察時間: AM 9:00~12:30, PM14:00~18:00
※木・土は9:00~13:00のみ